# 令和２年度前期学校評価

2020/10/7

（1）確かな学力の定着

*（評価の斜体はR1前期に比べ向上したもの）*

| 重点指標 | 年度当初の状況 | 今年度の具体的な取組 | 対象 | アンケート(7月→12月) | 評価 | | 分析 | 改善策 | 学校関係者評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 言語環境を整え、達成感のある授業を実践する。 | ・ 考えを持たせる指導をしている。(昨年度12月)<br>①27%②61% ①+② R1 88%（教員）<br><br>○ 昨年度のアンケートでは、「だいたいそう思う」が半数を超えている。<br>△ 自分の考えやまとめを書く時間の確保ができていない。 | ・ 自分の考えや意見を持って、学び合い学習を行い、他からの学びを感じとる。<br>・ 単元の最初に単元終了後に到達したいゴールの姿を生徒に示すなど、目標を持たせる。<br>・ まとめや振り返りなどを自分のことばで書く。<br>・ 単元の中で、「深める」場面を設定し、学習内容をより深める。 | 生徒 | ・「学校の授業がわかる」(①+②)<br>A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満<br>R2.7:91%(R1.7:91%)→A | A | A | ○ ①＋②の合計は前年度と同じであったが、①「あてはまる」は前年度26%→今年度42%となった。今年度の研究に沿って、教材研究を行い、生徒に浸透していることがうかがえる。<br>△ ③+④の合計は昨年度より１p減少したものの、9%だった。<br>○ 保護者アンケートは前年度①＋②＝64%から今年度①＋②＝73%で9p伸び、生徒が家で授業の話をしていることがわかる。 | ・単元のゴールを意識させて、個々の生徒に目標を持たせ、達成できたことを教員が認めていく。<br>・1時間の授業で学習したことを自分の言葉でまとめや振り返りを書くことによって、授業を理解したり、達成感あるものしたりすることができる。 | ・ポイントを絞って教員同士が授業を見合うことはよい。<br>・「1年生は活発に発言する」とのこと。表現力を高めるためにも小学校でも一層指導に励みたい。 |
| | | | 教員 | ・「わかる授業、達成感のある授業となるように努めた」(①+②)<br>A:95%以上 B:90%以上 C:80%以上 D:80%未満<br>R2.7:97%(R1.7:100%)→A | A | | | | |
| | | | 保護者 | ・「お子さんは、授業がわかりやすいと言っている」(①+②)<br>A:80%以上 B70%以上 C:60%以上 D:60%未満<br>R2.7:73%(R1.7:64%)→B | *B* | | | | |
| 指導法の改善に向け、教科部会の充実に努める。 | ○ 教科代表者会の開催、教科部会で話し合ってほしいことを明確にし、授業改善の協議を行っている。<br>△ 指導主事を招聘しての研究授業を１学期は４教科で実施した。 | ・ 各教科において、主体的・対話的・深い学びについての捉えを明確に持ち、単元計画を立てる。<br>・ 全教科部会で指導主事を招聘しての研究授業を開催する。<br>・ 「深める」について、研究を行う。<br>・ 期間を決め、参観のポイントを絞った授業参観をする。 | 教員 | ・「対話的な学びや深い学びの場面を単元の中に適切に取り入れている」(①+②)<br>A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満<br>R2.7:85%→B<br>・「教科部会の充実に努めた」(①+②)<br>A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満<br>R2.7:82%(R1.7:67%)→B | *B* | | ○ ①＋②＝85%　コロナへの細心の注意を払いながら対話的な学びを取り入れて、学び合い学習など工夫しながら行った。<br>△ 深い学びの場面については、教科で話し合いをしながら試行錯誤を行っている。<br>○ 前年度①+②67%、今年度は82%で16pのびた。１学期に４教科で研究授業を行い、指導案の検討や指導主事からの助言等を受け、より活発なものとなった。 | ・教科部会で協議する内容を研究部から提案する。<br>・授業参観週間を2学期は取り入れる。<br>・単元計画の立案にあたって、どの場面で学び合い学習を行うのか、また深める場面はどこなのかを考える。 | |

（2）豊かな心の育成

| 重点指標 | 年度当初の状況 | 今年度の具体的な取組 | 対象 | アンケート(7月→12月) | 評価 | | 分析 | 改善策 | 学校関係者評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 生徒会活動、学校行事、ボランティア活動等の充実に努める。 | ・ 生徒:学校行事や生徒会活動に積極的に取り組んでいますか。(①②)<br>R1.12：87%(R1.7:90%)<br>・ 教員:生徒会活動が生徒の主体的活動になるよう指導した。(①②)<br>R1.12：86%(R1.7:76%)<br>・ 保護者:お子さんは学校行事や生徒会活動に取り組んでいる。(①②)<br>R1.12：85%(R1.7:86%)<br>△ コロナ禍において、先の見通しが持てず、十分な活動計画を立てることができなかった。<br>○ 多くの制限がある中で、生徒会役員を中心に、新しい発想で取り組もうと努力している姿がみられる。<br>△ 生徒の自主性を引き出し切れず、活動に消極的な場合が見られる。<br>△ 行事などの削減、縮小に伴い、保護者の参観機会が十分確保できなかった。 | ・ 新しい生活様式を踏まえ、アイディアを出し合いながら、生徒の主体性を高める活動を進める。<br>年間計画を基本に、社会情勢や生徒の現状に応じた取組を進める。<br>・ 積極的に取り組める雰囲気を作り、集団での活動を通して自己有用感を高めていく。<br>・ 活動内容を発表する場を設ける。(放送、お便り、掲示等)<br>・ 各学年の担当教員が協力・連携し、計画的に委員会活動を推進する。<br>特別活動部内だけでなく、学習指導部、生徒指導部とも年度当初から連携を取り、余裕をもって活動を生徒に考えさせられるようにする。<br>学校便り、学年便り、メール配信等を活用し、生徒の活動を保護者に伝えていく。<br>ﾉｰﾈｯﾄ・ﾉｰｹﾞｰﾑ・ﾉｰﾃﾚﾋﾞﾃﾞｰを周知徹底し、親子の会話時間を増やす。 | 生徒 | ・「学校行事や生徒会活動に積極的に取り組んでいますか」(①+②)<br>A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満<br>R2.7:78%(R1.7:90%)→C | C | B | △ 全体的に低くなっているが、特に1年生（-17%）、2年生（-13%）が目立つ。<br>コロナ禍における学校行事の削減や縮小（遠足、部活動ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ、激励会）や全校集会を持てないために、委員会の強化月間、ﾌﾟﾋﾞｰﾙ等ができないことが原因と思われる。 | ・限られた状況の中で、何ができるのか、できることを一生懸命に取り組めるような手立て、雰囲気作りをする。（ﾘｰﾀﾞｰ会等との連携）<br>・後期の委員会計画立案では、定例の活動に＋αを追加する。<br>・運動会や合唱ｺﾝｸｰﾙ、遠足などの行事で「団結」や「絆」など自己有用感を高められるよう集団活動を強化する。 | ・資料にあった「地域や町内会等の行事や活動に積極的に参加している」が前年度を大きく下回っているのはコロナの影響である。今年度は地域行事も中止が多くやむを得ない。花鉢配布運動を通して地域とつながる意識を向上させてほしい。<br>・HPの一部で学年便りなど更新が遅い時がある。改善してほしい。 |
| | | | 教員 | ・「学校行事や生徒会活動が生徒の主体的活動になるよう指導した」(①+②)<br>A:85%以上 B:75%以上 C:65%以上 D:65%未満<br>R2.7:76%(R1.7:76%)→B | B | | ○ 制限がかかる現状の中で、可能な活動を模索しながら活動できている。 | ・先を見通した計画立案、生徒への指示を心がける。<br>他の分掌と連携しながら、無理のない活動を進める。 | |
| | | | 保護者 | ・「お子さんは学校行事や生徒会活動に取り組んでいる」(①+②)<br>A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満<br>R2.7:82%(R1.7:86%)→B | B | | ○ 全体としては、昨年度比較（-3%）とほぼ差はないが、1年の保護者は(-12%)と落ち込みが激しい。各種便りを通じて、情報発信に努めているが、保護者にまでは届いておらず、中学校での活動への期待にも達していない。 | ・各種お便り（学校だより、学年だより、生徒会だよりなど）やメール配信を通して、生徒の頑張っている姿を保護者に伝えらえるようにする。 | |

（3）健全な体の育成

| 重点指標 | 年度当初の状況 | 今年度の具体的な取組 | 対象 | アンケート(7月→12月) | 評価 | | 分析 | 改善策 | 学校関係者評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 「部活動に係る活動方針」に従い、生徒の健康や安全に配慮した部活動に努める。 | ・「部活動に係る活動方針に従って活動している」(①)<br>R1.12：67%(R1.7:56%)<br>・「活動時間は平日2時間程度・土日祝3時間程度」(①②)<br>R1.12：85%(R1.7:86%)<br>・「休養日は週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)」(①②)<br>R1.12：85%(R1.7:85%)<br>・「休養日は充実している」(①②)<br>R1.12：93%(R1.7:90%)<br>休養日平均(R1)(　)内はH30実績<br>運動部　平日: 92日( 75)　土日祝:73日(69)<br>文化部　平日:128日(114)　土日祝:99日(94)<br>○ 生徒は休養日を充実して過ごしている。<br>△ 顧問の活動方針に従って活動する意識は向上しているが、十分とはいえない。 | ・ 方針等に基づき、適切な実施に努める。<br>ア　活動時間(通常):平日2時間程度・土日祝3時間程度。<br>イ　休養日:週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)。<br>ウ　土日祝休養日:年間52日以上設ける。<br>・ 部活動方針・年間活動計画をＨＰで公表する。<br>・ 部顧問は月毎に活動計画及び活動実績を報告する。<br>・ 意識向上を図る。(学期毎に方針を確認、活動時間や休養日<br>・ の現状一覧を示す)<br>・ 活動計画でのチェックに努める | 教員 | ・「部活動に係る活動方針に従って活動している」(①のみ)<br>A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満<br>R2.7:68%(R1.7:56%)→C | *C* | *B* | ○ 活動時間や休養日が守られていると感じている生徒の割合は共に前年度を上回り、90%を超えた。<br>○ 休養日を充実して過ごしていると感じている生徒の割合は前年度を4p上回った。<br>△ 「活動方針に従って活動している」は前年度を12p上回ったものの68%であり、教員の活動方針を守る意識は十分とはいえない。 | ・学期毎に方針を確認し、意識向上を図る。<br>・活動時間や休養日の現状一覧を示し、互いに守るよう意識して指導にあたるようにする。<br>・適宜、人事評価面談等を通じて、適切な活動指導を促す。 | ・大会前などで部活動時間の延長の時は特に安全に下校するように指導してほしい。<br>・通学路には、暗くなると危険な場所もある。十分指導してほしい。 |
| | | | 生徒 | ・「活動時間は平日2時間程度・土日祝3時間程度」(①+②)<br>A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満<br>R2.7:90%(R1.7:86%)→A<br>・「休養日は週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)」(①+②)<br>A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満<br>R2.7:93%(R1.7:85%)→A<br>・「休養日は充実している」(①+②)<br>A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満<br>R2.7:94%(R1.7:90%)→A | *A* | | | | |

（4）重点に迫る体制づくり

| 重点指標 | 年度当初の状況 | 今年度の具体的な取組 | 対象 | アンケート(7月→12月) | 評価 | | 分析 | 改善策 | 学校関係者評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 情報共有に努め、報告・連絡・相談を迅速・着実に行い、組織的に対応する。 | ○ すべての職員が組織的対応，迅速・丁寧な対応に努めたと感じている。<br>○ 問題行動等の聞き取りから報告までを１枚の用紙でできるようにしたことで，聞き取りや報告が確実に行われるようになった。<br>○ からかいもいじめと捉える雰囲気が確立され，これまでは軽く流されていた事案も学年全体で取り組むことが増えている。しかしながら，すべての事案がそうではないことは課題である。<br>△ 対応完了の報告がない場合がある。<br>△ 教職員全体で共通した行動を取れていない事柄がある。 | ・ 生徒指導関係の報告･連絡・相談の集約先を明確にするとともに、どのようなケースで報告等が必要になるのかを年度初めに明示する。<br>・ 組織的対応が求められるケース（いじめ対応等）について，職員会議等を活用して短時間で研修を行う。<br>・ 問題行動等の発生時に使用する「聞き取り用紙」を，いつでも誰でも簡単に使用できるよう，設置場所や様式を今後も工夫し，広く活用されるようにする。<br>・ 教職員の共通行動を徹底するための強化週間等を定期的に設ける。 | 教員 | ・「情報を共有し、報告･連絡･相談を着実に行い組織的対応に努めた」(①+②)<br>A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満<br>R2.7:100%(R1.7:89%)→A<br>・「アンテナを高くし、問題行動や危機管理に対し、迅速･丁寧･誠実な対応に努めた」(①+②)<br>A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満<br>R2.7:94%(R1.7:92%)→A | A | | ○ 働き方改革の流れの中で，職員朝礼等が減少しており，打ち合わせをする時間が減っている。その中で，生徒の小さな変化を早期に共有するため，各学年で打ち合わせの時間を設けるなど，工夫して取り組むことができた。<br>○ 問題行動自体は年々減少しているが，各種対応の中で「聞き取り用紙」が活用されており，十分な聞き取りと報告が行われている。<br>○ 前年度までの生徒指導記録を参考にして，その時期に起こりうる問題行動等を予測し，生徒指導部を中心に共有したことがよかったと思われる。 | ・生徒の情報を共有するための打ち合わせを行う場合は，主幹教諭とも連携し，他の学年にもわかる形で打ち合わせを実施する。<br>・より使いやすい聞き取り用紙を作成するための意見を教員から集める。<br>・生徒指導部を中心に共有している問題行動等の予測については，職員会議でも提案資料に盛り込む等して教職員全体で共有していく。 | ・スクールサポートスタッフの活用に関する数値が下がっているのは定着している証拠といえる。<br>・スクールサポートスタッフの働きを数値化して職員にわかりやすく伝えてはどうか。 |
| 働き方改革への意識の向上と更なる業務改善を図る。 | ・「時間外勤務の減少に向け努力している」(①②)<br>R1.12：97%(R1.7:87%)<br>・「本校の業務改善は進んでいる」(①②)<br>R1.12：86%(R1.7:68%)<br>・ 時間外勤務月平均　R1 60:21　H30 69:47<br>・ 時間外平均45時間以下 R1 7人(18%)　H30 5人(13%)<br>○ 職員の意識は向上しており、職員は概ね業務改善が進んでいると感じている。<br>○ 時間外勤務時間は3年連続減少している。<br>△ 月80時間以上の教員が固定しており、時間外勤務が月平均45時間以下の教職員が極めて少ない。 | ・ 時間外勤務時間の減少に努める。<br>・「定時退校日」「19:30消灯日」「勤務時間選択日」を活用する。<br>・ スクールサポートスタッフを活用する。<br>・ ＩＣＴ支援員の活用等により、業務改善を更に推進する。<br>・ 時間外勤務の多い職員への支援・指導を継続する。<br>・ 業務の平準化に努める。 | 教員 | ・「時間外勤務の減少に向け努力している」(①+②)<br>A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満<br>R2.7:82%(R1.7:86%)→B<br>・「本校の業務改善は進んでいる」(①+②)<br>A:90%以上　B:75%以上　C:60%以上 D:60%未満<br>R2.7:74%(R1.7:68%)→C<br>・「スクールサポートスタッフを活用している」(①+②)<br>A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満<br>R2.7:74%(R1.7:94%)→C<br>・ 時間外勤務時間(平均)<br>A:45h以下 B:60h以下 C:70h以下 D:70hより多い<br>R2.4～7:42:57 (R1.4～7:75:42)→A | C | | ○ 4月～8月の時間外勤務時間が大きく減少した。(4/11～5/31が休校だったことが大きく影響している)<br>△ 「時間外勤務時間の減少に向け努力している」は82%で前年度を4p下回った。固定化がみられ、全体的に意識の低下が感じられる。<br>△ 「本校の業務改善は進んでいる」は74%であり、前年度を6p上回ったものの十分とはいえない。<br>△ 「スクールサポートスタッフを活用している」は74%であり、前年度を20p下回っている。 | ・業務の平準化に努め、時間外勤務の多い職員への支援・指導を継続する。<br>・計画的で効率的な業務遂行を奨励する。<br>・スクールサポートスタッフの業務を周知し、拡大を図ると共に、更なる活用を呼びかける。 | |